

殷王墓の墓制についての一考察

小 澤 正 人

はじめに

河南省安陽市殷墟遺跡の発掘は、1928年に中華民国中央研究院により始められた。その後、調査は中央研究院内の組織である歴史語言研究所が担当することになり、1937年に日中戦争により中断を余儀なくされるまで継続しておこなわれた。殷墟遺跡の調査は中国考古学黎明期における画期となるものであり、この調査により中国考古学の基礎が固められた。そして調査の成果により、殷王朝の社会や文化の様相が明らかになり、中国考古学研究のみならず古代史研究にも大きな進展をもたらすことになった。

歴史語言研究所による発掘での成果の一つに、侯家莊墓地における殷王陵の発見がある。残念ながら王陵内の全ての王墓が早い時期に盗掘を受け、特に墓室中央は完全に破壊されており、その本来の姿を復元することは難しい状況であった。しかしその規模の大きさ、そして多数の殉葬者や祭祀で犠牲とされた人骨が発見されたことで、注目を集めた。

殷墟遺跡の調査は、中華人民共和国成立後は中国社会科学院（当初は中国科学院）考古研究所に引き継がれ、現在に至るまで継続している。なかでも墓葬の調査が多く、資料の増加とともに、多くの研究がおこなわれている¹⁾。殷王陵・王墓についても例外ではなく、特に殷王墓の造営順序については、多くの論考が発表されている²⁾。その反面、王墓の墓制については、その破壊が激しく、本来の状況を復元することが難しいことから、十分には論じられてこなかった。しかし、近年、王墓には及ばないものの、それに次ぐ規模の墓葬では未盗掘墓が複数見つかり、これら墓葬を参考とすることで、王墓の墓制についても検討が可能となってきている。

本稿ではこのような認識に基づき、殷王墓の墓制を明らかにすることを目的とする。まず王墓のなかでは比較的保存状態が良好であった侯家荘 1001 号墓（以下侯家荘墓地の王墓については「侯家荘」を省略する）を検討し、そのうえで他の王墓と比較することで、殷王墓の墓制を明らかにしたいと考えている³⁾。なお本稿で検討するのは、侯家荘墓地で発掘された墓葬のうち、墓道を四方向に付設するものとする。

1 1001 号墓の遺構・遺物（第 1 図）

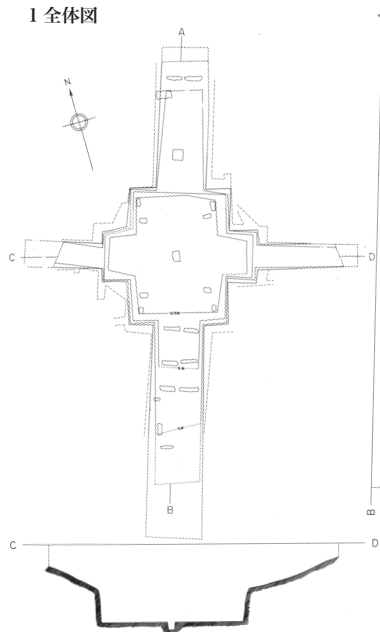
1001 号墓は、墓坑の四方向に墓道が付設された亜字形墓である。墓坑のプランは、南北方向に長い長方形で、その東部・西部に張り出し部が付加されたものとなっている（第 1 図 1・2）。墓道も南北方向の墓道が、東西方向の墓道よりも幅が広くなっており、南北墓道が主たる墓道だと考えられる。さらに南北の墓道を比べた場合、南墓道の方が長いことから、南墓道が最も重要な墓道だと考えられる。墓坑の地上部には、墳丘や建物基壇などは確認されていない⁴⁾。

墓坑は墓口で南北長 18.9m、東西幅 13.8m、墓底では主室で南北長 15.9m、東西幅は 11.0m（東西張り出し部を含めた場合は 19.2m）、深さは 10.5m を測る。墓坑は盗掘坑により中央から西南側にかけほぼ底部まで破壊されており、本来の墓坑や埋土は墓底と北側と東側の一部に残っているのみである（第 1 図 3）。墓道は基本的には原状を留めていると考えられる。

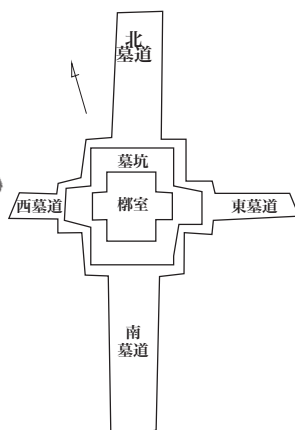
発掘調査では、墓底まで掘り進み、槨室底部の検出に成功している。槨室は残存した底板の配置から、墓坑同様に南北方向に長い長方形を基本として、東西方向の耳室が付加された構造だと考えられている（第 1 図 2・4）。報告者は槨室には南側から入ったと想定している。槨室は主室で南北長 9.7m、東西幅 6.5m、東西耳室を加えると幅は 11.3m となる。槨室の高さは、周囲を固定した二層台の高さから、3m 程度と考えられている。

墓坑底部からは腰坑を含む 9 基の殉葬坑が検出されている（第 2・3 図）。また二層台から殉葬者と副葬品が検出されている（第 4・5 図）。墓道では墓坑に近い部分の調査がおこなわれ、殉葬者と犠牲者が見つかっている（第 4・7・8 図）。

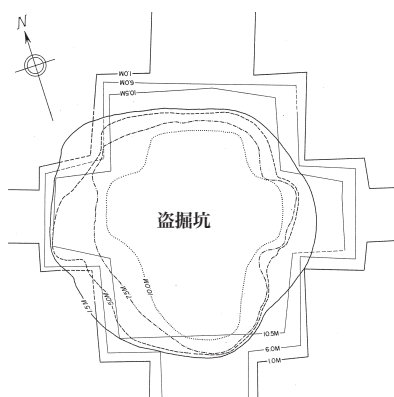
1 全体図



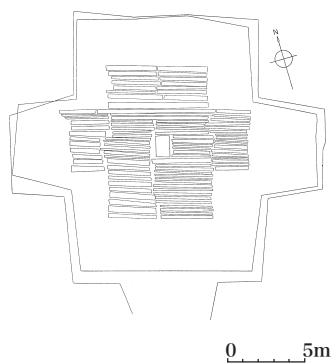
2 墓坑・槨室概念図



3 墓坑中央部盗掘坑



4 槨室の痕跡



第1図 侯家莊1001号墓の遺構

墓葬の構築については、墓道・墓坑の掘削→墓底殉葬坑の構築→槨室の構築と槨室内への木棺・副葬品の搬入（南側から）→二層台の構築と二層台上での殉葬者と副葬品の配置→埋め戻しとその過程で墓道での祭儀→地上までの完全な埋め戻し、といった順序が想定される。このうち埋葬にあたっての痕跡が残されているのは、(1) 墓底、(2) 槨室、(3) 二層台、(4) 墓道と墓坑埋土である。以下、それぞれの場所について検出された遺構や遺物について検討する。

(1) 墓底（第2・3図）

墓坑底部の殉葬坑は、中央の腰坑と壁際の殉葬坑に分かれる。腰坑からは頭位方向を南とした人骨1体・犬1体・石戈1点と若干の子安貝が出土している。殉葬坑からはいずれも人骨1体と犬1体が出土し、それぞれ銅戈が副葬されていた。

(2) 槨室

槨室の構造は前記の通りである。底部を除き破壊されており、副葬品などの状況は不明である。

(3) 二層台

二層台では殉葬者と副葬品が確認されている。

殉葬者については、11人が確認されている（第4・5図）。このうち墓坑が掘られ、木棺に埋葬されたものとして7人（第5図 殉葬1～6）、墓坑や木棺が確認されていないものが5人である（第3図 殉葬7～9⁵⁾）。木棺の殉葬者は1体を除き副葬品が確認できなかった。副葬品が確認できたのは殉葬4で、青銅礼器の銅鼎・銅甗が1点ずつ、さらに銅戈1点、玉柄形器1点、玉環1点で副葬されていた。木棺がない殉葬者については、副葬品は確認できなかった。

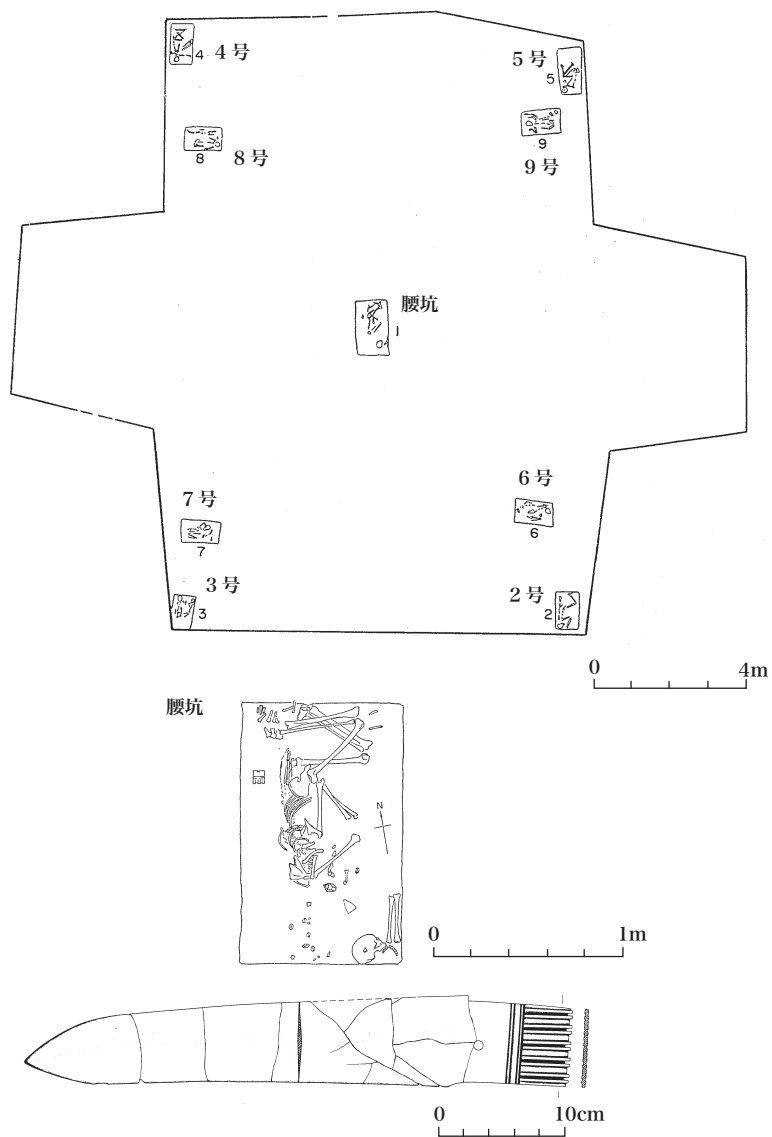
副葬品は漆器や木器が主だったようで、漆の痕跡が確認されているのみである（第6図1～10）。1は双頭の蛇、2・10は獣頭、4・5は虎である。8は獣柄をもつ円形盤、9は方形盤と推定されている。11は車馬具の一部と考えられる銅泡と楯の痕跡と考えられている。

(4) 墓道および墓坑埋土

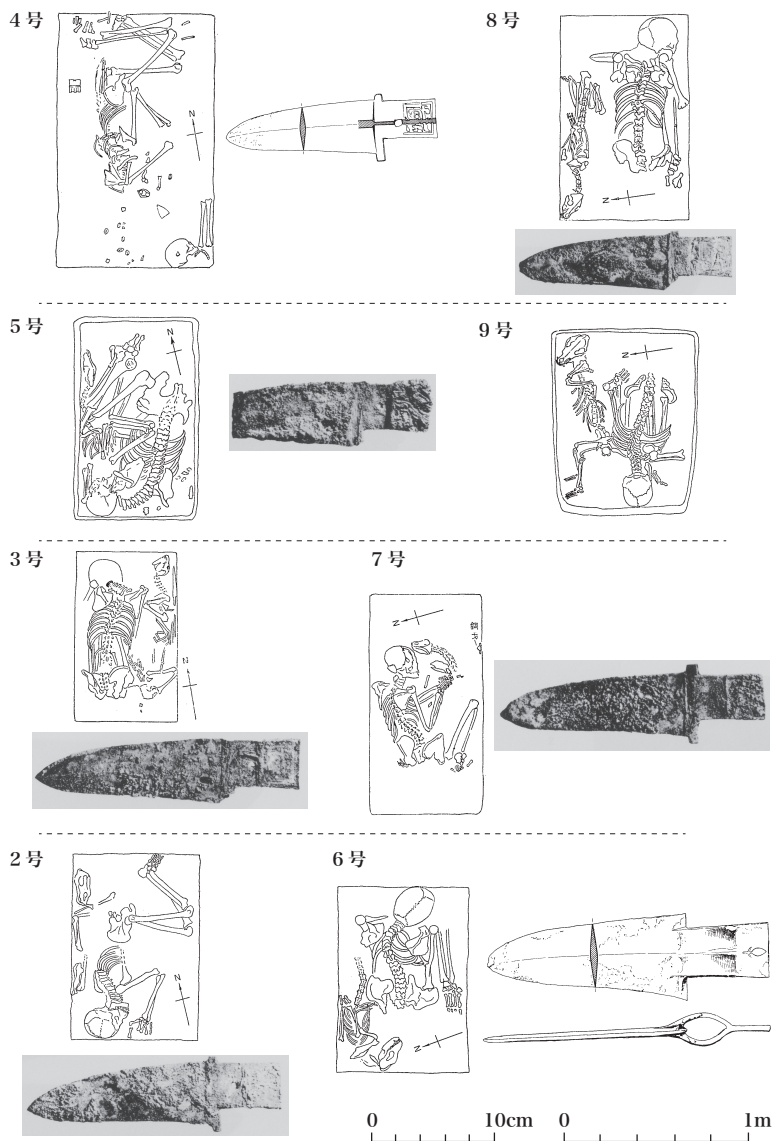
1001号墓では盗掘坑が大きく、墓坑埋土内から原位置を保った遺物などは報告されていない。

墓道には、殉葬墓と犠牲者が確認されている。

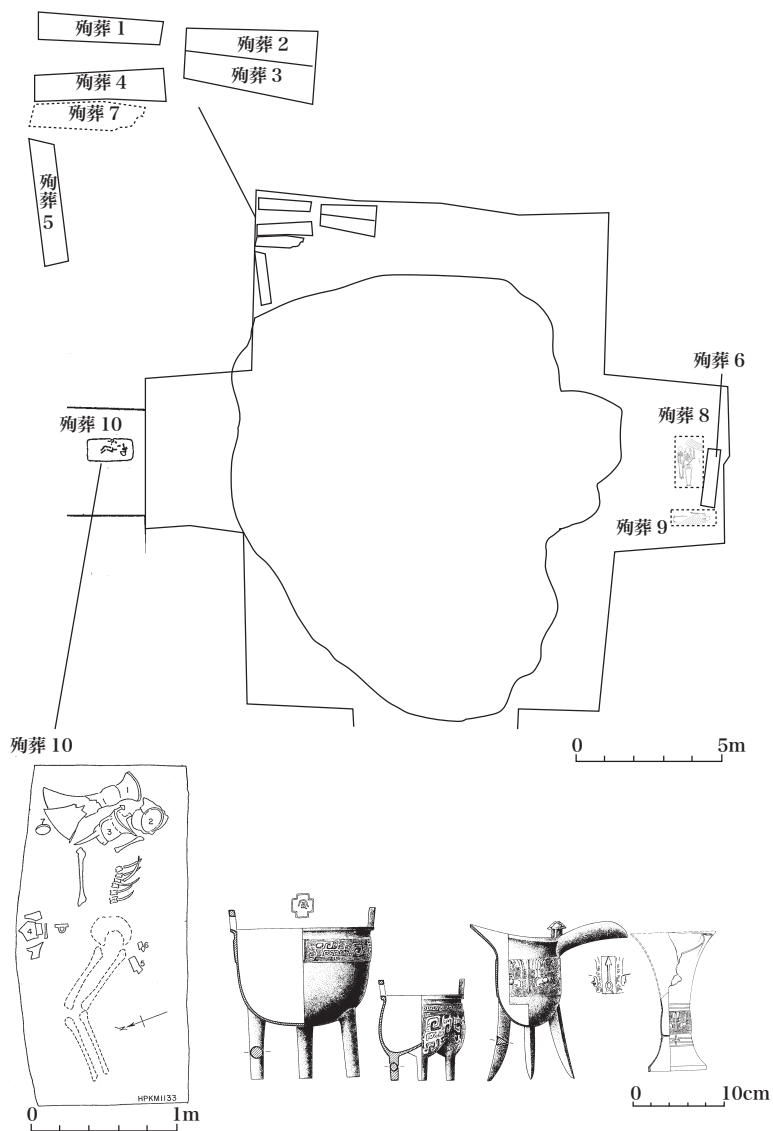
殉葬墓は西墓道で1基が確認されている（第4図 殉葬10）。銅鼎・



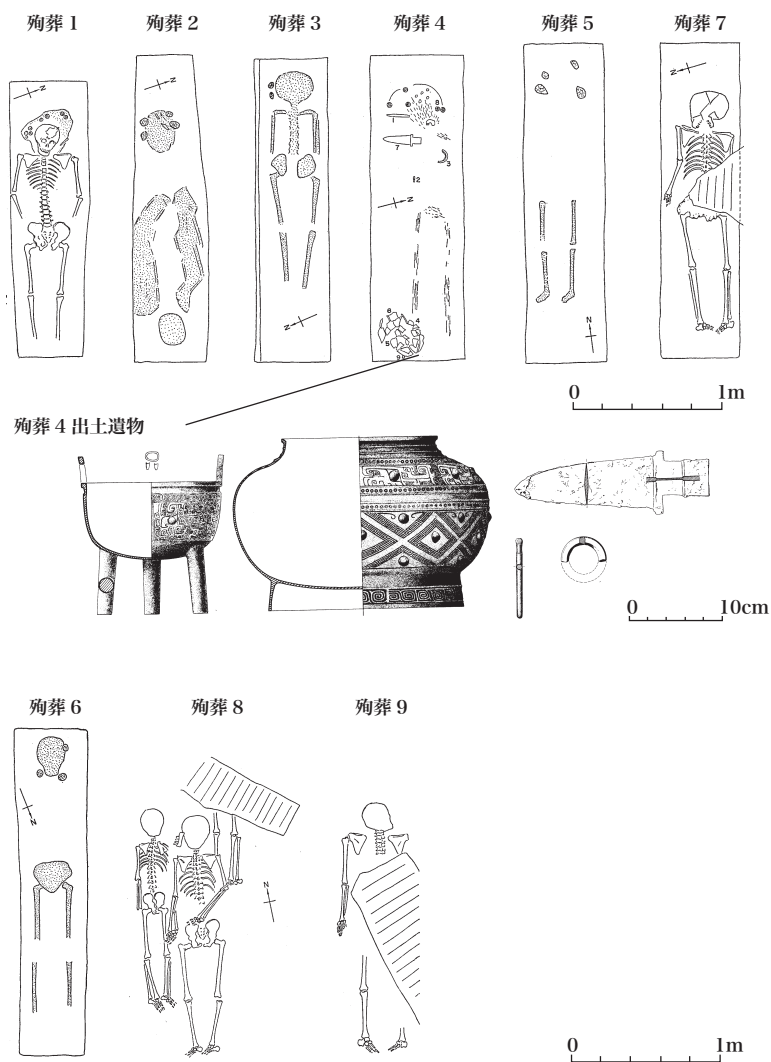
第2図 基底殉葬坑 (1)



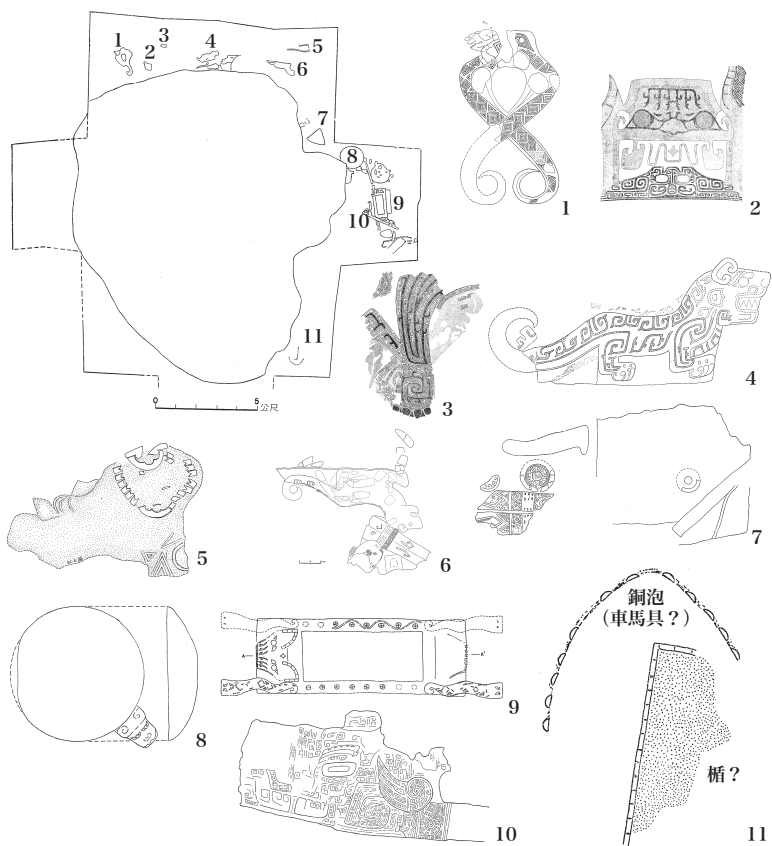
第3图 墓底殉葬坑 (2)



第4図 二層台・墓道の殉葬者 (1)



第5図 二層台・墓道の殉葬者 (2)



第6図 二層台の遺物

銅鬲・銅爵・銅觚などの青銅礼器が出土している。

犠牲者は、身体部と頭部が別個に出土している。身体部は頭部が無い状態で確認されており、斬首の後、放置されたと考えられる（第7・8図）。身体部は南墓道で59体、東墓道で1体が確認されている。

南墓道の身体部は、墓坑に近い墓道下部の北群と墓道上部の南群に分かれる（第7図）。北群からは38体が見つかっており、Ⅰ～Ⅶ組に分けられる。出土人骨の大まかな年齢は15～20歳前後とされる。人骨の姿勢は一定しないが、ほとんどの人骨は仰向けの状態で発見されている。ただしⅣ組の向かって左から3体目の人骨は拝跪した状態で検出されており、この場所で斬首された可能性が高い。そうであれば、多くの犠牲者はこの場で首を切られ、仰向けに放置された可能性が高い。特に副葬品などはない。南群は東部の一部を1550号墓の墓道で破壊されているが、21体が出土している。状況は北群と同じである。

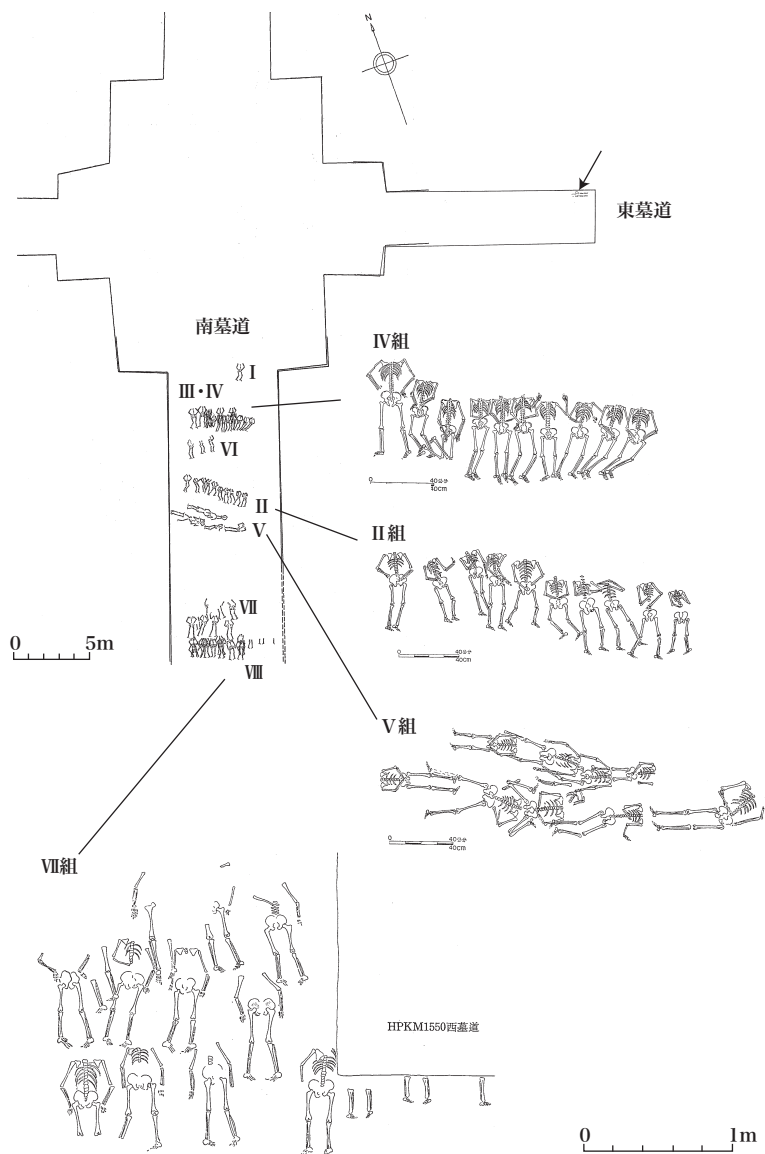
斬首がおこなわれた時期については、墓道の幅いっぱいの人骨が広がっており、通行できない状況にあることから、槨室に副葬品を安置し、槨室上部の埋め戻しが済んだ段階と考えられる。また北群と南群の間には空隙部があることから、両群の斬首の間には時間的な経過があったと考えられる。この時間的な経過がどれほどのものかについての確証はないが、やはり人骨が墓道幅に広がっていて通行に不便であることを考慮するならば、北群が先で、南群が後と考えられる。

東墓道の一体は、墓道口で見つкаっている（第7図 矢印）。

頭部は各墓道で出土しており、その数は73個にのぼる。内訳は南墓道からは42個、北墓道からは14個、東墓道からは6個、西墓道からは11個となっている。このほか墓坑埋土からも破碎された頭骨が出土しており、埋められた頭骨はさらに増える可能性がある。頭骨の出土深度にはかなりのばらつきが見られる（第8図）。この状況から、斬首された頭骨は、墓坑や墓道の埋め戻し時に、かなり恣意的に放置されたと考えられる⁶⁾。

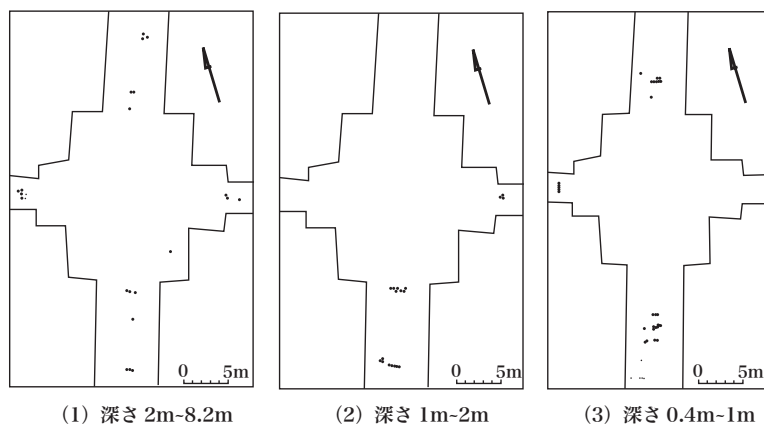
以上の出土状況からは、墓道について、次のような過程が考えられる。槨室での埋葬がおわったのち、まず墓道で斬首がおこなわれる。斬首は墓道に沿って下部から上部に数度にわたり、身体部はその場で放置された。斬首された頭部は別に集められ、墓坑や墓道の埋め戻しに伴い、恣意的に放置されていった。

I 身体部の検出状況



第7図 犠牲者 (1)

2 頭部の分布



第8図 犠牲者 (2)

このような犠牲者のありかたについては、特に副葬品がないこと、殷墟では祭儀にあたり人間を斬首することがおこなわれていたこと⁷⁾、などを考えれば、墓道での祭儀がおこなわれた結果であると考えられる。

以上が1001号墓の遺構・遺物の出土状況である。盗掘により槨室内の状況は不明だが、墓底では殉葬、二層台では副葬品と殉葬、墓道・墓坑埋土では犠牲者などが確認された。次に以上の状況が他の王墓でも確認できるか、節を改めて検討してみたい。

2 王墓の比較

ここでは、1001号墓の墓底、二層台、墓道・墓坑埋土での状況が、他の王墓でも確認できるかを検討する。

(1) 墓底

墓底では腰坑が1143号墓、1004号墓、1003号墓、1550号墓などで確認されている⁸⁾。1550号墓の腰坑では、玉戈が確認されている。ただし1001号墓のような墓底四隅の殉葬坑は見られない。

(2) 二層台

二層台上には、1001号墓と同様に副葬品の配置と殉葬が確認されて

いるほか、1001号墓では見られなかった祭儀遺構が検出されている。

副葬品が確認されたのは1004号墓と1003号墓である。1004号墓では、南墓道との接続部分で、副葬品がまとまって出土している（第9図）。副葬品は層位的に置かれており、下層には武器が置かれていた。副葬されていた武器には青銅冑、青銅戈、青銅矛、木製楯などがある。点数は明確ではないが、報告書によれば兜が50点以上、青銅戈が69点、青銅矛が360点以上出土している。木楯は痕跡のみが検出されている。武器以外では破損した頭骨が1点出土している。上層からは方鼎2点、石磬、石柄形器が出土している。

1003号墓では、木楯の痕跡が確認されている。

殉葬は1550号墓で確認されている（第10図）。1550号墓では、殉葬墓が2基確認されている。49号墓からは青銅礼器として鼎、爵、觚が、玉器として玉璧、玉玦、玉戈、玉柄形器が出土している。このほか、玉筭が多数出土している。また40号墓からは青銅礼器として爵・觚、青銅武器として戈・鏃、製銅工具として斧、楽器として玉鈴などが、さらに玉器として玉璧、人物・動物飾、玉柄形器が出土している。

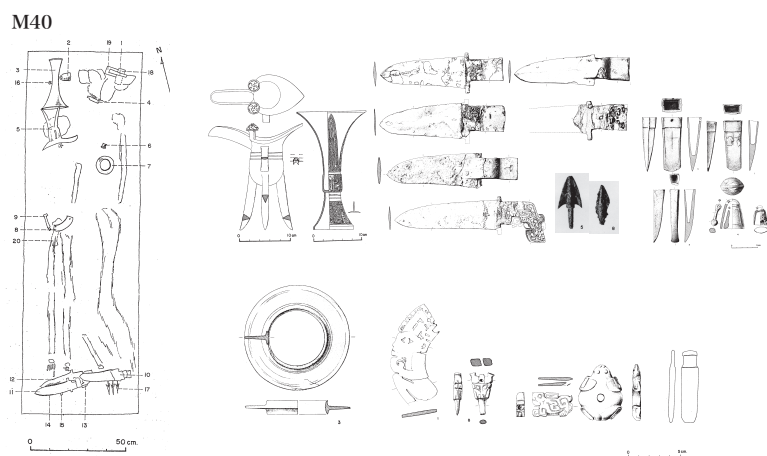
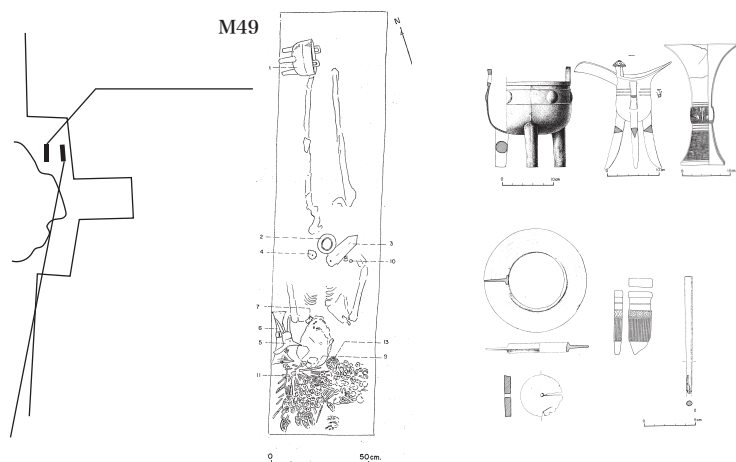
祭儀遺構は1002号墓で確認されている（第11図）。1002号墓二層台北側では、陶盆・陶皿・陶盤とともに、3本の骨が確認されている。報告書では、肉を供献した祭祀と考えている。

（3）墓道・墓坑埋土

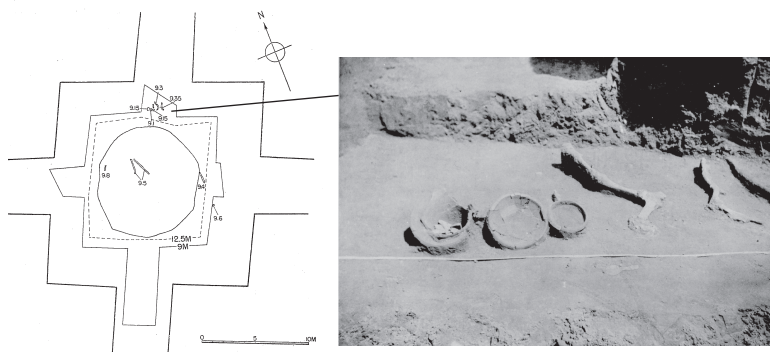
墓道と墓坑埋土からは祭祀遺構と犠牲者が発見されている。

祭儀遺構が見つかったのは1400号墓で、2個所で見つかった（第12図）。1個所は南墓道口近くで、青銅器11点がまとまって出土した（第12図1）。特に遺構は無く、墓道底から2mの位置で見つかり、ある程度埋め戻された段階で置かれたと考えられる。出土したのは青銅礼器の銅尊、銅罍、銅罍各1点と爵・觚各4点である。いま1個所は東墓道で、やはり特に遺構は無く、墓道上に銅盂、銅盤、銅壺、銅勺といった青銅礼器のほか、銅人面、銅円形器5点が出土している（第12図2）。いずれの場合も遺構に伴っていないことから、祭祀の後回収されず、そのまま埋められたと考えられている。

犠牲者については頭部のみが出土している。1550号墓では北墓道と南墓道にそって頭骨が見つかった（第13図1）。北墓道では傾斜に沿い、24列にわたり、総数235個の頭骨が発見された。南墓道でも傾



第 10 図 1550 号墓二層台殉葬坑



第 11 図 1002 号墓二層台祭祀遺構

斜に沿い、8個の頭部が発見されている。報告者は頭骨には脊椎がついたものがあることから、埋葬時には首に皮膚がついた状態であったと考え、これら頭部が斬首後間もなく埋められたとしている。

また 1400 号墓では墓坑埋土で深さ 6m から 0.25m の間で、29 個の人骨が発見されている（第 13 図 2）。1002 号墓でも墓坑埋土中から 9 個の人骨が出土している。報告者は配列などに規則性がないことから、埋め戻し中に随時放置されたと考えている。1500 号墓でも 111 個の頭骨が、墓坑埋土から出土している（第 13 図 3）。やはり一定に規律はなく埋め戻し中に随時置かれたと考えられる。

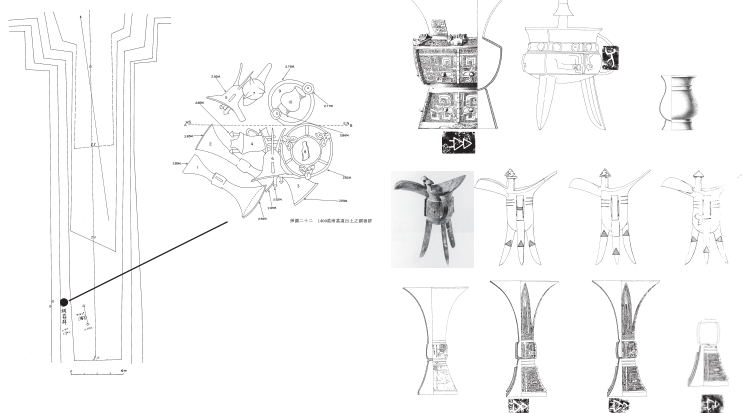
これらの王墓では、1001 号墓と異なり身体部が確認されていない。ただし頭骨には脊髄が残っていることから斬首後間もなく放置されたと考えられること、頭骨が多数であることを考えると、遠方で斬首がおこなわれ、それが墓葬まで運ばれたとは考えがたく、墓葬近く、例えば墓口部などで斬首がおこなわれた後、頭部が墓坑内に放置されたと考えられる。

以上、殷王墓の埋葬状況について検討してきた。これらの所見をもとに、殷王墓の墓制について検討してみたい。

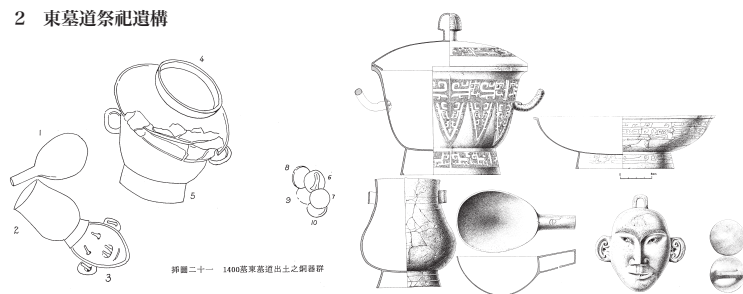
3 殷王墓の墓制

ここまでの検討から、殷王墓では、墓底、二層台、墓道・墓坑埋土で

1 南墓道祭祀遺構

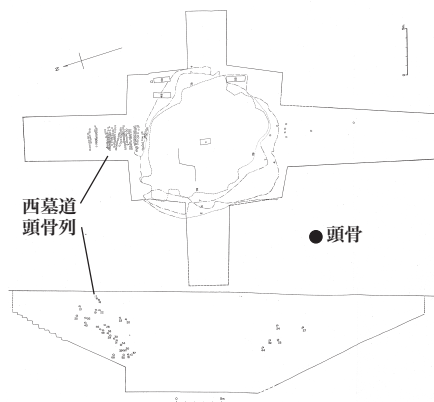


2 東墓道祭祀遺構



第 12 図 1400 号墓墓道祭祀遺構

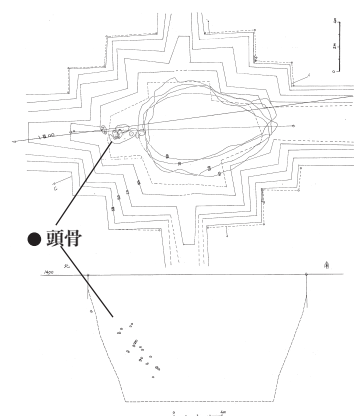
1 1550 号墓



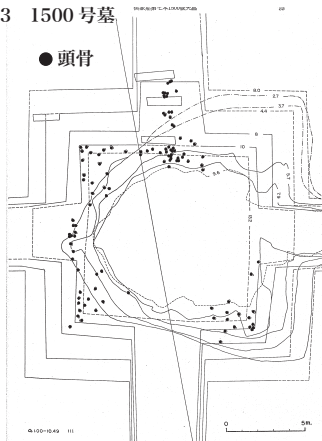
西墓道
頭骨列



2 1400 号墓



3 1500 号墓



第 13 図 頭骨出土状況

副葬品の配置、殉葬、祭儀などがおこなわれたことが明らかになった。ただし、現在の王墓では盗掘で槨室が破壊されており、そのため槨室の状況が、上記の検討には考慮されていない。槨室については、殷墟遺跡で発掘された未盗掘墓によるかぎり、木棺に入れた遺体の安置場所、副葬品の配置場所としての性格が考えられる。

この槨室を加えて、改めて王墓を構成する要素をまとめると、王墓は遺体・副葬品の安置場所、殉葬者の安置場所、祭祀の場の3つの要素から成り立っていることがわかる。

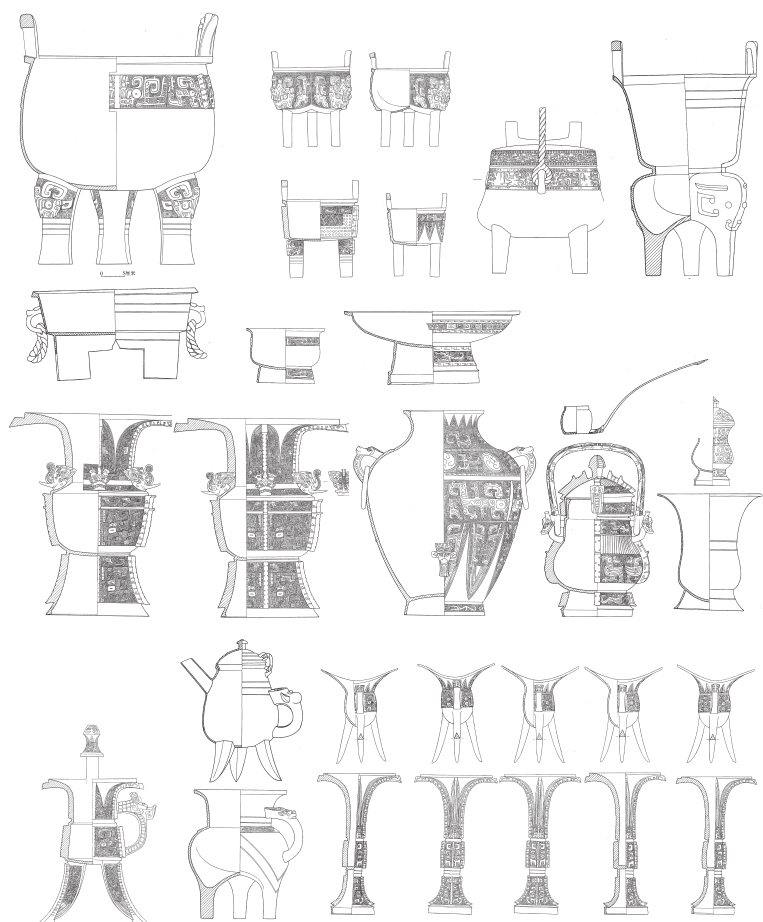
このうち遺体と副葬品の安置場所としては、槨室と二層台があげられる。槨室については破壊によりその実態は不明であるが、殷墟で調査された未盗掘墓から推測することができる。例えば郭家荘160号墓では、槨室から青銅礼器が出土している（第14図）⁹⁾。また同じく未盗掘墓であった婦好墓でも青銅礼器が出土しているが、そのなかには多数の「婦好」銘の青銅器が含まれており、被葬者「婦好」が、祭儀にあたり使用した器物であると考えられている¹⁰⁾。つまり郭家荘160号墓や婦好墓で槨室内に副葬された青銅礼器は、死者が生前使用していた器物と考えられる。これを敷衍すれば、槨室内に置かれた副葬品は死者が生前に使用した器物と考えることができる。

二層台上に置かれていた器物には、青銅礼器、青銅武器、車馬具、玉器などがある¹¹⁾。この他に、多量の漆器・木器があったことが痕跡からわかっており、さらに有機物を入れたと考えられる木製の箱も確認されている。このなかには1004号墓のように多量の武器を副葬した例もある。このような多量の武器を被葬者が個人的に使用していたとは考えづらい。従って、二層台上の器物は、被葬者と関連はするものの、その重要度が、木槨内よりは低いものが一括して置かれたと考えられる。

以上の検討から副葬品は、被葬者と強く結びつくものが槨室内に置かれ、それよりは距離があるものが二層台上に置かれたと考えられる。

殉葬者は、槨室構築以前の墓底と以後の二層台・墓道に分けられる。

墓底の殉葬者は青銅器や玉器の戈および犬とともに埋葬されている。殷墟では墓底中央部に腰坑が確認されることが多く、一般には犬が、規模が大きな墓葬では犬とともに人が埋葬される事例が見られる。腰坑の性格については、死者の保護との考え方が一般に採用されている。1001号墓では、腰坑のみではなく、墓底の四隅に2基ずつ殉葬坑が設けられ



第 14 图 郭家莊 160 号墓槨室内出土青銅礼器

ている。これら殉葬坑から戈を持った殉葬者と犬が出土したことから、腰坑と同じ性格をもつものと判断できる。一般の墓葬では腰坑のみであるのに対して、1001号墓で腰坑と殉葬坑をあわせて9基が確認されたことは、殷墟における墓葬の階層差の表現と考えることができる。

ただし中央の腰坑内の殉葬者のみが石戈で他の殉葬者は銅戈であった点には注意が必要である。腰坑が被葬者直下に設けられるのに対して、他の殉葬坑が墓底縁辺であることを考えれば、腰坑の重要度がより高いと考えられる。その腰坑に副葬されたのが石戈であり、他の殉葬坑の青銅戈であったことを考えると、墓底の殉葬坑では石戈が銅戈より重視されていたと考えられる。実際に殺傷能力がある青銅戈ではなく、象徴的な武器である石戈が重視されたのは、その呪術性にあったと考えられる。これに墓底の殉葬坑に一般に犬が埋葬されることを考えあわせるならば、これら殉葬坑の犬や殉葬者に期待されたのは、墓主を邪惡なものから護る辟邪の役割であったと考えられる。

二層台および墓道上の殉葬者については、そのあり方は多様である。ただし青銅器や玉器を副葬した例もあり、殉葬者のなかには、一定の社会的な地位を持つ者もいたと考えられる。この場合、殉葬者は死者である殷王に仕えることを目的に埋葬されたとするのが妥当であろう。

祭儀は二層台と墓道でおこなわれている。二層台では家畜を使った祭儀が、墓道では青銅礼器を使った祭儀と犠牲による祭儀がおこなわれていた。

このうち複数の王墓で確認できたのは犠牲を用いた祭儀である。1001号墓では墓道で斬首がおこなわれ、身体部はそのまま放置され、頭骨は墓道の埋め戻し中に適宜放置された。その他の王墓では、墓葬外で斬首がおこなわれ、頭骨のみが墓坑や墓道の埋め戻し中に放置されている。以上の状況からは、頭骨や身体骨そのものには興味が払われていないことがわかる。つまり人間を用いた祭儀においては、斬首という行為こそが重要であり、頭骨や身体骨そのものは祭儀の供物などに用いられたのではない、ということになる。

以上の検討に基づき、1001号墓の機能を再度整理すると、殷王墓には①死者と死者へ供された殉葬者・副葬品の安置場所、②死者への祭儀の場所、といった二つの機能があったことがわかる¹²⁾。前者のうち、副葬品は死者にとって身近なものとその外縁にあたるものにわけられ、殉

葬者は死者を護るものと死者に仕えるものにわけられる。この構成を見る限りにおいて、王墓において死者は死後も存在すると考えられており、そのため、死後の生活において不自由がないために、副葬品や殉葬者が準備されたと考えられる。

祭儀は、死者を槨室に葬り、その蓋が閉じられた後におこなわれている¹³⁾。その祭儀も、家畜を使ったものや青銅器を使ったものなど、複数の種類が実行されている。そのなかで、中心となっていたのは、人間を犠牲とした祭儀である。犠牲とされた人間の数は、盗掘により失われたものがあるため正確な数値はわからないが、最も多い 1400 号墓では 200 人以上と考えられる。出土した頭骨や身体骨は、死者に供献されたものではなく、死者に対する祭儀の痕跡と考えられる。

殷墟で実施された祭儀については甲骨に記された卜辞から復元されており、自然神や祖先神など、殷墟の人々が信じた多数の神々に対して、多様な祭儀がおこなわれていたことが知られている¹⁴⁾。特に殷王の祖先神に対する祭儀では、人間を犠牲として捧げられていたことがわかっている。このことから墓道や墓坑埋土から見つかった犠牲は、祖先神となった王に対する祭儀で使われた人間と考えられる。つまり殷王墓では、死者や副葬品・殉葬者が埋葬された後、祖先神となった王への祭儀がおこなわれたのである。

死者の埋葬は、人間の死から始まる葬送儀礼の一部であり、埋葬にあたっての規範が墓制である。殷王墓の墓制とは、殷王の死体を安置するとともに、死後の殷王がこれまでと同じ生活が送れるように生前に使った器物を副葬し、同時に殷王を護る人物や殷王に仕える人物を殉葬する。そして殷王と殉葬者や器物が安置されたのち、祖先神になった殷王に対して祭儀をおこなう、といったものであったと考えられる。

おわりに

以上、殷王墓の墓制について検討を加えてきた。その結果、殷王墓とは死者である殷王を安置するとともに、王が生前の生活を継続するための器物や殉葬者を安置する場所であり、同時に祖先神となる王に対する祭儀の場としての機能を具えた施設である、と考えられることが明らかになった。

殷王墓はその規模の大きさ、そして殉葬者や犠牲者の多さから、しばしば殷王の政治的権力の大きさを表す、と評価されてきた。しかし本稿での検討からは、殷王墓を政治権力の表現として捉えることには、違和感が感じられる。本論文で明らかにした殷王墓とは、殷王の死後の生活の安寧を準備し、同時に祖先神となる殷王を祀るための施設であり、そこには殷王の政治権力の偉大さを他者に見せつけるモニュメントとなるような要素は見いだせない。殷王墓が基本的に地下の施設であり、地上に王墓であることを印象づける墳丘のような施設がないことも、この印象を強くさせる。この点について、松丸道雄による殷王墓の性格についての以下の指摘は示唆に富んでいる¹⁵⁾。

(殷) 王墓の豪壮さというものは歿王の生前における支配者としての権力の偉大さを讃美するものではなく、10 個の太陽のそれぞれの末裔である祖先神の、さらに末席に列することになった歿王が、今後、人間世界をよりよく守護してくれるよう、現世の王族たちが祈念を込めて、作ったものだったのではなかろうと思われるのであります。

本稿では殷王墓の墓制について検討してきたが、残念ながら、副葬品、特に槨室内の器物については具体的な検討ができなかった。この点については、王墓に次ぐ規模の未盗掘墓を資料として、今後検討していきたいと考えている。

注

- 1) 代表的な著作として以下のものがある。

胡進駐『殷墟晚商墓葬研究』(2010 年 北京師範大学出版社 北京)

鄧向平『商系墓葬研究』(2011 年 科学出版社 北京)

- 2) 殷王陵の研究状況については以下の文献を参照。

張帆『殷墟西北岡王陵區大墓 総合研究』(河南大学修士学位論文 2021 年)

- 3) 侯家莊墓地に關する報告書は以下の通りである。

梁思永、高去尋『侯家庄第二本 1001 号大墓』(1962 年 中央研究院歷史語言研究所 台北)

梁思永、高去尋『侯家庄第三本 1002 号大墓』(1965 年 中央研究院歷史語言研究所 台北)

梁思永、高去尋『侯家庄第四本 1003 号大墓』(1967 年 中央研究院歴史
語言研究所 台北)

梁思永、高去尋『侯家庄第六本 1217 号大墓』(1968 年 中央研究院歴史
語言研究所 台北)

梁思永、高去尋『侯家庄第五本 1004 号大墓』(1970 年 中央研究院歴史
語言研究所 台北)

梁思永、高去尋『侯家庄第七本 1500 号大墓』(1974 年 中央研究院歴史
語言研究所 台北)

梁思永、高去尋『侯家庄第八本 1550 号大墓』(1976 年 中央研究院歴史
語言研究所 台北)

梁思永、高去尋等『侯家庄第九本 1129、1400、1443 号大墓』(1996 年
中央研究院歴史語言研究所 台北)

なお、特に断りがない限り、本文中の各墓葬の記載は上記の報告書による。

- 4) 殷墟遺跡の墓葬に墳丘がないことについては、ほぼ定説となっている。
一方、墓坑上の建物については、議論がある。詳しくは胡進駐前掲書参照。
- 5) 殉葬 7 は、報告書の挿図 13 (本稿の第 5 図 殉葬 7) では墓坑があるよう
になっているが、報告書の図版 21 (写真) では墓坑は確認できない。
- 6) 侯家莊の他の王墓では墓坑埋土中からも頭骨が発見されており、1001 号
墓でも本来は墓坑埋土中に頭骨があった可能性がある。他の王墓から見つ
かった頭骨については後述する。
- 7) 中国社会科学院考古研究所編著『中国考古学 夏商卷』(2003 年 中国
社会科学出版社 北京)
- 8) 1400 号墓、1002 号墓、1500 号墓、1217 号墓は、地下水の湧水により二
層台上部までしか調査がおこなわれていない。そのため墓底の状況は未確
認となっている。
- 9) 中国社会科学院考古研究所『安阳殷墟郭家莊商代墓葬』(1998 年 中国
大百科全書出版社 北京)
- 10) 中国社会科学院考古研究所『殷墟婦好墓』(文物出版社 北京 1980 年)
- 11) 上の器物には殉葬者への副葬品は含まない。
- 12) 殷墟遺跡の墓葬において、埋葬過程で祭儀がおこなわれていたことに
ついては、唐際根が指摘している。
唐際根「殷商時期的“落葬礼”」(古方・徐良高・唐際根編『一剣集』所収
1996 年 中国婦女出版社 北京)
- 13) ただし殷墟の墓葬では、槨室内の青銅礼器に獣骨が入った事例も確認さ
れている。この場合は、槨室に運び込まれる前の段階で食物や酒を青銅礼
器に入れた祭儀がおこなわれ、それがそのまま槨室内に持ち込まれたと考
えられる。このような事例として前記の郭家莊 160 号墓のほか、大司空村
303 号墓を挙げることができる。

中国社会科学院考古研究所編著『安陽大司空』(2014年 科学出版社 北京)

14) 陳夢家『殷墟卜辞綜述』(1956年 科学出版社 北京)

15) 松丸道雄「殷人の概念世界」(『シンポジウム 中国古文字と殷周文化』所収 1989年 東方書店 東京)

本研究はJSPS 科研費 JP20H01350 の助成を受けたものです。